

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2014年12月6日

文責：JUN

## 学びの深まりと手立て

### 1 学びを深める具体的な手立てをどう見つけるか

ある学校の公開研究会で、「学びの深まりが実現するために」と題した講演をしました。学びの深まりは、『「学び合う学び」が深まる時』（世織書房）を出版した3年ほど前から、学校・授業づくりを支えるわたしの重要なテーマの一つでしたが、ここに来てその重みが増してきていると感じていたからです。

わたしの講演は、いつものように授業映像を用いたものにしました。そして、その授業のどこが「学びの深まり」につながっているのかと語りました。講演は参加者の教師たちにどのように聞いてもらえたのでしょうか。

その一端が公開研究会を実施した学校が行ったアンケートによってわかりました。もちろん、研究会全体に対する感想の一部として書かれているものですから、わたしの話がどう伝わったか詳しくわかるわけではありません。それでも、話したことに対する反応を知ることができるのはありがたいことです。参加者の反応は好意的でした。ただその中に、「話はよくわかったけれど、それに至る手立てを語ってほしかった」というような文面があったのです。

この文章を読んだとき、この教師の思いがよくわかると思いました。公開研究会に参加する教師たちは一日も早く豊かな授業を実現したいと思っているからです。それにはどうしたらよいのだろう、そう考えつつ授業を見ていたのでしょう。考えてみれば、わたしも、かつてその思いを抱いていた一人だったと思います。

では、なぜ、自分もそうであったのに、そうした教師たちの希望にかなう具体的な手立てをいつも話さないのでしょうか。それは、話さないのではなく、話せないのだし、話してはならないからなのです。

授業における教師の専門性は、やり方を知るだけでは育ちません。教師という人間が何人もの人間つまり子どもたちを相手に、瞬間瞬間の事実在即して作り出す「授業」という営みは、かなりの教養と人間性と熟練を必要とします。そのことを横に置いて安易に手立てを語ることは非常に危険なことだと言わざるを得ないからです。

この感想を書いた人は、そんなことは百も承知していてそのうえで手立てを求めているとも考えられます。グループを入れるとか、子どものわからなさを学びに組み込むとかいった「学び合う学び」で大切にしていることはすべてやっているのでしょうか。けれども、こうありたいと思う授業に

はなかなかない、だから、公開研究会に参加した、今まで気づくことができなかつた何か特別な手立てを発見できるのではないか、そういうことだったのかもしれませんが。もしそうだとしたら、この教師の気持ちはもっとよくわかります。

けれども、この教師と面と向かい合って、手立てを語ることを乞われたとしても、このようにしてみたらというようなことを語ることはしないでしょ。それは、その人がどのような授業をしているか知らないからです。手立ては、その人の今ある状況・事実に応じて生みだすものです。だから、その人の授業を見ないで、こうしてみたらよいのではないかと語れないのです。

わたしは常々、教師の専門性は経験の積み重ねなしには身につかないと言っています。授業をする経験というより、授業を振り返る経験です。それは、自分の授業を深める手がかりは、すべて自分の授業にあるからです。それがどんな授業であっても自分の授業の深まりはそこからしか生まれないのです。

教師は自らの授業を常に振り返らなければなりません。その際、子どもの学びの事実、子どもの学びへの自分のかかわりを見つめるのです。そして考えるのです。もちろん、一人で見ても大切なことに気づけないかもしれません。そう感じたら、周りの信頼できる人に授業を見てもらいコメントをもらうのです。とにかく自分の授業事実を振り返る、その継続的な経験が専門性を拓いてくれるのです。かつて目にした他の教師の授業、憧れを抱いた授業はそのときよみがえります。自分に感銘を与えてくれた教師のしていたことがくっきりと心に響いてきます。あの授業で見たことの意味が、そしてそのためにどういう努力をしなければならぬかがわかってきます。自分にとって必要な手立ては、そういう気づきの中から姿を現します。

公開研究会に参加してそこで目にした授業にあこがれを感じるの素晴らしいことです。他の教師の授業を見て学びたいと思わない教師、あこがれを感じることはない教師に多くの進歩は望めないでしょう。ですから、冒頭のような感想を書く教師がいるということはいずれのことです。こういう教師が、わたしの言う「経験」を積んでいってくれたら、その経験に応じて自分の授業を育てていってくれたらどんなによいかと思います。

そういう思いから、講演において細かい手立てを語ることはこれからもしないでしょう。けれども、教師たちにはあこがれを抱いてほしい、どこにどういう素晴らしさがあるのかを知ってほしいとは思っているので、多くの事例を見ていただくようにしていきます。そんなわたしの話を聴いてくれた教師の中から、自分の授業を見てほしい、すべての教師の授業を公開するので学校に来てほしいという声が出てきたとしたらどんなにかうれしく思うことでしょう。もちろん、そのすべてに応えることは難しいのだけれど。

## 2 深まりのチャンスをとらえる

この日の講演で取り上げた事例は、「かけ算」を学ぶ算数の授業と「ごんぎつね」という物語を読む国語の授業でした。算数の授業では、課題の質が学びの深まりを実現するという、そして、物語を読む授業では、教師が学びの深まるチャンスをとらえなければならないということを考えてもらいました。

「ごんぎつね」の二つの授業映像は、栗や松茸が投げ込まれる不思議さを加助に相談する兵十の後をごんが「かげぼうしふみふみ」ついていくという5の場面を読む授業でした。

わたしは、ことばに触れて読むという読み方をずっとしてきた子どもたちなら必ず持ち出してくることとして一つのことを提示しました。それは、ごんが「かげぼうしふみふみ」という近さにまで兵十に近づいたことです。どの学級でも子どもたちはごんに寄り添うように読んでいます。だから、この近づき方にどきっとするのは。教師は、そこに読みが深まるチャンスがあるということを感じなければなりません。それは、どういう深まりなのでしょう。

二つの授業、そのどちらにおいても、ごんは兵十の話の続きを聞きたいからついていったのだという考えが出た直後に、「かげぼうしふみふみ」という近づき方の危なさを出してきました。

### 【一つ目の授業】

**みずほ** 「二人の話を聞こうと思って」のところで、さっきはお念仏があるから途中までの話をしていて、その次までの話をまだしてないから、ごんは、その、聞いている話がまだ途中だから、その続きも聞きたいから二人の話を聞こうと思ってついていったんだと思います。

**としや** 「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました」のところで、兵十のかげだから、兵十にばれないのかな。

### 【二つめの授業】

**あきのぶ** 1の場面で、ごんは兵十にいたずらをしていたから、兵十が話の続きで、「ぬすつとぎつねがまたいたずらをしようと思っているな」と言うかもしれないから……、言うかもしれないし、話の続きを聞きたいから、兵十と加助に殺されるかも……、かげぼうしをふみふみ行っているんだから殺されるかもしれないけど、それでも、聞きたいからついていった。

**けん** お念仏がすむまで井戸のそばにしゃがんで待っているほど聞きたいのを…自分の話を…自分の話の続きを聞きたい。

**つよし** わからないことなんだけど、「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました」のところで、なんでごんは道のかたがわにかくれなかったんだろう。

としやもつよしもごんの危なさを感じたのです。だから、「ばれないのか」「なんでかくれないのか」と思ったのです。ただ、二人は、ごんが兵十の話の続きを聞きたいからそんなに近づいたのだということはわかっていたのだと思います。自分の発言の直前にそういう考えが出されていたのを聞いていないはずがないということもありますが、二人の様子からしてもともとわかっている、それでもそこまで近づいたごんのことを言わざるを得なかったのだと思われるからです。

わたしは、ここをこそ、読みを深めるチャンスにしなければならぬと考えるのです。それは、次のような考えによります。

兵十の話の続きを聞きたいということは、栗や松茸を持っていった自分の行為が兵十にどう受け取られるのかを知りたいということです。ごんの行為は、うなぎのつぐないから始まっていますが、「おれと同じひとりぼっちの兵十か」というつぶやきが表す、ごんの兵十への思いによるものでも

あります。このごんの思いは「ごんぎつね」という物語の柱になっているということを疑う人はいないでしょう。

一方、ごんは、ひとりぼっちの狐であり、人間に対して常にいたずらばかりしてきたということから、決して近づいたりしないように生きてきたのです。最後の場面で兵十がつぶやく「うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめ」が、人間から見たごんと人間の間を象徴しています。

けれども、物語を読む読者は、人間、とりわけ兵十に対するごんの思いをひしひしと感じます。人間から見たごん、ごんから見た人間、特に兵十、両者の見方はあまりにも違い過ぎます。深い深い「溝」がそこには横たわっています。

「かげぼうしふみふみ」という近さにまで近づいたごんの行為に危うさを感じるのはその「溝」がわかっているからです。そして、「兵十の話の続きを聞きたい」というごんの気持ちがわかるのは、ごんの兵十への思いに寄り添っているからです。この二つの狭間から、危うさを超えて近づいていくごんのいじらしさが浮かび上がるのです。としやとつよしの疑問は、まさにそれを読む契機になるのです。

ここまでの物語をじっくりと読み進めてきていたら、ごんは、いつも自分の思い込みで行動していることがわかります。うなぎの一件でも、麦を研ぐ兵十を見て「おれと同じひとりぼっち」と感じる場面でも、いわしの一件でも、ごんは、いつも、こういうことなのだ自分で決めてしまっています。そこに、ごんのやさしさも健気さも人の良さも感じることができるのですが、それが「かげぼうしふみふみ」という近づき方にもつながっているように思います。

ごんは、何か気になることがあると夢中になります。兵十のためにせつせと栗や松茸を運ぶようになったのもその夢中さによりますが、その栗や松茸をだれが持ってきていると兵十が言うのか、それを知りたいということに対しても夢中になったのだと言えます。

ごんは、もう、兵十のことで頭がいっぱいなのです。思い込み、夢中になったごんは、今、自分のしてきた行為が、自分が思いを届けようとしてきた兵十にどう判断されるのか、頭の中はそのことだけになっているのです。冷静さを失い、通常の考え方ができないくらい麻痺しているといってもいいかもしれません。

ごんは、こうして、麻痺した状態のまま、一途に兵十への思いを募らせ、神様のしわざにされてもまた栗を持っていきます。そして、いつも栗を投げ込む納屋に兵十がいたという不運があったとは言え、これまで決して入ることのなかった兵十のいえの中に足を踏み入れます。そして、思いを届けたかった相手である兵十の手にかかってしまうのです。考えてみれば、ごんは知らず知らずこの悲劇の結末に向かって歩んでいたのかもしれない。いつの間にか、避けられないものになっていたのです。

これはわたしの読みです。このわたしの読みを子どもにわからせるために授業をするわけではありません。あくまでも「読むのは子ども」です。けれども、それは、十人十色、好きなように読んでいけばよいということではありません。「読む」という行為を深めなければなりません。それは、作品の「ことばに深く触れる」、作品に描かれている「状況に出会う」ということです。そのために、教師は、「ことばと状況」を子どもの前に差しさなければなりません。それをしないで読みは深まりません。「かげぼうしふみふみ」、そこに表されたごんと兵十の間の「溝」、それこそ「ことばと状

況」ではないでしょうか。

### 3 「題材観の質」ということ

このように考えてもらえれば、学びの深まりのチャンスをとらえるには、教師がその物語をどう読んでいるかということが決定的にものを言うということがわかるのではないのでしょうか。それは、何も、物語を読む国語の授業に限ったことではありません。どの教科のどんな内容の授業であっても、結局は教師がどういう題材観を有しているかで決まるのです。もちろん、「学ぶのは子ども」であり、子どもの探究と学び合いによる発見のある授業にしたいのですが、そんな探究も学び合いも発見も、題材観が薄っぺらい教師の教室では実現しないのです。それは、前述したような、肝心の場面での方向づけができないからです。

学びの深まりを目指すとき、教師の「題材観の質」が決定的にものを言います。学びの深まり実現の第一のポイントとして述べた「課題の質」も、教師の題材観が不十分だったら生み出すことはできません。

課題の設定ということで「ジャンプの課題」の大切さが叫ばれていますが、それにはその教科の専門的な学びをどれだけしているかということが大切になります。教師は、「真正の学び」ということをもっと意識しなければならないのです。

わたしに「もっと手立てを語ってほしい」という希望を届けてくださった人が、もしこの文章を読んでくださっていたら、きっと気づいてくださっていると思います。わたしが手立てを語れない、語ってはならないというわけを。

「ごんぎつね」の授業における「深まりのチャンス」についても、そこがチャンスだとして、どういう状況で、どのように子どもたちに切り込むか、そこで子どもとどう対峙するか、テキストにどう向き合わせるか、それこそ手立てです。そこまでは、わたしには語れません。それは、学級、学級ですべて異なるはずですが、手立ては、その授業の教師と子ども、そして学びの状況に応じて、その教師が編み出すものなのです。

「ごんぎつね」を例に引いたこともあって、講演のエピローグに、南吉の三つの詩を朗読しました。南吉15歳の作「夕方河原」、26歳の作「春風」、21歳の作「貝殻」の3作品です。詩を読み終えたとき、体育館のなかにいつもとは全く異なる世界を感じたのはわたしだけではなかったと思います。

なぜ、わたしは南吉の詩を読んだのか、それは皆さんお一人おひとりがご判断ください。どのように受け取ってもらっても構いません。「ごんぎつね」の最後に描かれた「青いけむり」を一人ひとりが心で感じ取りたいのと同じだと考えてもらったら、これ以上うれしいことはありません。

なお、「学びの深まり」にはもう一つ「学び合いの質」という重要なものがあります。そのことについては、いずれ事例をもとに詳述したいと思っています。